



28 回生のみなさん ご卒業おめでとうございます



学年主任 森本 未知子

28 回生のみなさん、三田西陵高校での 3 年間を通して、様々なことを感じ、学び、成長してくれたことと思います。よく厳しいことも言いましたが、素直で愛嬌のあるみなさんの姿に、いつも支えられていました。本当にありがとう。

人生には何度かの卒業があります。学校の卒業はもちろんのこと、子どもから卒業して大人になることも、親元から卒業して独立することも、その他様々な形の卒業があります。どの卒業にも必ずと言ってよい、別れの一抔の寂しさと新しいことへの期待と喜びがついてきます。寂しさが大きいほど、その場所が自分にとってかけがえのない

居場所であったということ、そしてそこで頑張ってきた証であると思います。その誇りを胸に、新たな場所へ大きな希望を持って進んでください。みなさんが今後もよい経験をたくさん積み、実り多き人生を送ってくれることを願っています。卒業おめでとう！！

1 組担任 小林 真依

28 回生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。学生として過ごす時間というものはあっという間で、卒業する実感がまだない人もいるのではないのでしょうか。この 1 年間は進路選択という大きな節目に立ち、毎日悩み、そして一生懸命に過ごしたことと思います。

春からは「新入生」や「新社会人」として新しいスタートが始まります。新しい環境に身を置くとき、私が心の中で大切にしている言葉があります。「置かれた場所で咲きなさい」という言葉です。この言葉はノートルダム清心女子大学の学長を長年にわたって務められた渡辺和子さんの言葉です。当時思わぬかたちで学長に任命され、悩んでいた渡辺さんに、一人の宣教師が次の短い英詩を手渡してくれたそうです。「Bloom where God has planted you. (神が植えたところで咲きなさい)」

生きていくと、楽しいこともあれば悲しいこともあり、上手くいく時もあれば思い通りにならない時もあるかと思いますが、置かれた場所でまずは根を張ってみる。根が張ったら花も咲く。新しい事に不安はつきものですが、自信がないときはいつもこの言葉を思い出して自分を励ましています。どんな場所でも、28 回生のみなさんは立派な花を咲かせる力を持っていると思います。

三田西陵高校があるゆりのき台は、街路樹として「ユリノキ」が多く植えられていますが、みなさんはユリノキの花を見たことがありますか。ユリノキ(百合の木)は 5 月頃に百合のような花を咲かせ、その花言葉は「幸福」と言われているそうです。

みなさんと過ごした三田西陵高校での 3 年間はとても幸福な時間でした。ありがとう。どうか健康に、そして丈夫に成長することを願っています。

2 組担任 片山 裕意

28 回生のみなさん卒業おめでとうございます。

この文章の依頼を受けてから何を書くか色々考え、みなさんにひとつの言葉を贈りたいと思います。

「牛乳で言ったら確実に腐っている。しかし、ヨーグルトで言ったら出来立て。」

これは、吉田敬さんの言葉です。ネガティブなような、ポジティブなようななんとも言えない言葉ですよね。私はこの言葉を物事の見方を変えれば何事もネガティブにとらえることもできるし、ポジティブにとらえることもできると解釈しました。

今後みなさんは様々な人生の選択をしていくことになります。その度にこの言葉を思い浮かべ、そして考えてください。結局どの道に進んでもいいことも悪いこともあるものだ。であれば、自分にとってポジティブな道に進んでみてはどうでしょうか。

3 年間お疲れさまでした。



3 組担任 近藤 和彦

『卒業おめでとう』

28 回生の皆さん、卒業おめでとうございます。

私は「教師生活最後の3年間を一担任で」ということで28 回生の担任団に入れてもらいました。コロナ、コロナの3年間で多くの行事がなくなり、普通(?)の高校生活ではなかったかもしれません。でも、そんな中でもそれなりに楽しい3年間だったのではないかと思います。

これからそれぞれの新しい進路で活躍していくことと思います。今の世の中すごいスピードで変化をしていきます。先生が教師になった頃は、まだコンピュータが学校に1 台あるかないかの頃でした。なんせ「昭和」でしたから。今では小学生がスマホを持つ時代。この先どう変化していくのか想像もできません。だからこそこの先も一生勉強が続くことでしょう。地に足をつけ一步一步進んでください。そして何年か後、立派になった君たちに会えたらうれしく思います。先生は……もうしばらく再任用で働きたいです。体と命を大切に。お元気で！

4 組担任 吉田 秀一

28 回生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

みなさんが春から門をくぐる大学、短大、専門学校、就職先。そこには、実にさまざまな個性をもった人たちが、日本中から、そして世界の国々から集まっています。未来への希望に満ち溢れた国、あるいは怒りや混乱に惑っている国。自分にはない“何か”を背景にして生きてきた人達と出会い、語り、ときには羨ましがったり悔しがったりケンカしたりして、「なぜ？」を常に自分のアタマで考えながら、自分自身が本当にやりたいことや社会に対してなすべきことを見つける充実した生活にしてほしいと願っています。28 回生のみなさんすべての新しい門出を、心からお祝いします。

5 組担任 秦 佳菜子

卒業おめでとう。これからの人生、自分らしく、人に迷惑をかけず、しっかり生きてください。どんな人生を送るかは自分次第。(だけどやっぱり人の迷惑になることは避けよう。誰も得しない。)自分が何をしたいのか、どう生きたいのかをしっかり考えて行動してください。Every day may not be good, but there's something good in every day. 人生楽しんだもん勝ち！



副担任でお世話になった先生方より

前川 一美

ご卒業おめでとうございます。皆さんとは9月からのお付き合いだったので、たったの5ヶ月…されど5ヶ月でした。私にとって最高の3年生、楽しい5ヶ月でした。受験前の作文指導では、正直円形脱毛症になるくらい悩みましたが、それでもとても楽しかった。

そのコミュカで元気に、楽しく、素敵な大人になってください。

柴崎 茂昭

『旅を始める人たちへ』

「耕して天に至る」という言葉がありますが、その出発点が貧にあるのか勤勉にあるのか。山がちである日本の風土は、そこに暮らす人々のたゆまぬ努力と工夫を要求してきたことは事実です。そこで繰り返された行為は労苦の連続であったかもしれません。しかしそこに工夫の末に実った、徒ではない到達点があるようにも思えます。それは自己の人生に忠実に向き合ったということで見事なものです。

これから旅を始める一人ひとりが、未知なる世界にひるむことなく、勇気をもって進むことが大事です。そして自己の人生の広がり求めて、眼を開き、刻苦すべきところは刻苦し、遠く広く、また高く歩みを進めて行くことを願ってやみません。若人の前途に幸多からんことを。

津田 悠希

卒業生の皆さんへ、

この度は、お疲れ様です。このたび卒業することができましたこと、誠におめでとうございます。これまでの苦勞や努力が実り、そして新たな道を歩み始めることができることが誇らしいことです。

これは AI に書いてもらった、卒業生へのメッセージの冒頭部分です。不自然さはほとんどありません。

こんな AI 全盛期となる時代を生き抜くために必要なことは、自分らしさを持ち続けることです。高校卒業後の世界は無限に広がっています。よく遊び、よく学べ。ネット上で追体験をするのではなく、リアルを体験していこう。たくさん遊べ！意味のないことなんて1つもない！28 回生の皆さん卒業おめでとう！

東浦 賢治

『言い忘れたこと』

最初の言葉も最後の言葉もない。対話のコンテクストには果てがない。それは無限の過去と無限の未来へと広がっている。どんなに遠い過去の対話から埋もれた意味も、最終的・決定的に捉えることはできない。なぜならそれはその後の対話の中で絶えず更新されていくからである。対話のどの瞬間をとってみても、そこには忘れられた意味の膨大な集積があるが、それはその後の対話のどこかの時点で思い出され、新しい生命をあたえられる。なぜなら絶対的な死というものはありえない。どんな意味にもいつの日かかならずや帰還の祝祭がある。

ミハイル・バフチン

28 回生のみなさん、お久しぶりです。私のことを覚えていますか。

突然の家庭に事情が生じ、年度途中でみなさんの前から去ることになってしまいました。上記のバフチンの言葉ではありませんが、もっとみなさんと対話を続けたかったという心残りをもった退職でしたので、それをこの拙文のタイトルとします。

さて、上記のバフチンの言葉ですが、なかなか難解ですね。実は過去にもこの言葉を西陵生向けに紹介したことがあります。その時は「対話」という言葉を「進路」という言葉に置き換えて読んで欲しいと言いましたが、今回は「対話」を「生きること」あるいは「人生」に置き換えて読んでみてください。そうすると人生には決まってしまった人生などというものはなく、それまでの人生は生きていくことの中で絶えずその意味を更新されて新たに作り直されていくものだという意味になると思います。やや乱暴な解釈ですが。(笑)

私たちの周りでよく聞く例を挙げると、進学した大学のレベルで人生が決まった、この会社に入ったから自分の

人生が見えたなどということですね。進学した大学や入った会社などはさほど意味を持ちません。何も決定的なものなどないのですよ。決定するのは、肉体的に死ぬときです。それまでは私たちの生は絶えず更新され続け、新たなものになっていきます。私事で恐縮ですが、私の娘婿の祖父は105歳で人生を終えましたが、90歳代半ばで新たに農業を始めようとしていたそうです。多くの人がもう自分の人生はそろそろ終わりだと思ふような年齢で新たなことを始めていくこと、言い換えればまだその先に希望を持つこと、素晴らしいことですよね。

繰り返しますが、生きることとは何か決定されたものを生きることではない、それは絶えず新たなものになっていく、これらを不安なものとしてとらえるのではなく希望として持つということです。

ミハイル・バフチンについてですが、バフチンは20世紀のロシア(ソ連)の思想家です。対話理論の先駆者のひとりとされています。社会主義時代のソ連の中で冷遇され、スターリンによって流刑になったりもしています。その業績が認められたのは晩年に近くなったころです。そう、バフチン自身も新たな生を更新していった人なのです。そして私たちの生もそうあるべきだと私自身強く願っています。



稲垣 光芳

28 回生のみなさんと、1 年：社会と情報の授業、2 年：2 年 2 組の副担任としてかかわることができました。ありがとうございます。2 年 2 組の生徒はユニークな生徒が多く、毎日の掃除がとても刺激的でした。

植田 聡

28 回生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。

28 回生諸君に最後に望むこと、それは積極的であり、同時に謙虚であってほしいということです。消極的に生きることはやめましょう。何事にも失敗をおそれず、積極的にあたっていこう。しかし謙虚さを失った積極さは、それが善意から出たものであっても、他人に迷惑を感じさせたり、思いやりから生じたものでも、好意の押しつけになってしまう。「積極的であれ、そしていつも謙虚であれ。」



源 真紀

ご卒業おめでとうございます。皆さんと過ごした2年間で懐かしく思い出されます。人との出会いを大切にできる、そんな大人になってください。



佐竹 貞春

『初心生涯』

28回生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。「初心生涯」という言葉を皆さんに贈ります。私は剣道の先生から教わりました。世阿弥の書『花鏡』の中に記されている「初心忘るべからず」を言い換えた言葉です。大まかな意味は、「謙虚な気持ちで生涯、稽古を続けるべきである。」です。世阿弥は能の奥義として記していますが、人生を歩むうえにおいても示唆深い言葉と思います。

私は今、老後の初心をどう持つのかという課題に直面しています。君たちも自分の初心を持って歩んでください。そして、節目ごとにその都度の初心を持つようにしてみてください。

初心忘るべからず

此の句、三カ条の口伝(くでん)あり

是非(ぜひ)の初心忘るべからず

時々(じじ)の初心忘るべからず

老後の初心忘るべからず

此の三、能々(よくよく)口伝すべし

※ 出典 『花鏡』奥段 (世阿弥)

佐藤 義晃

生徒の皆さんお元気でしょうか？三田西陵高校から益田東高校へ赴任して早くも一年が経とうとしています。

入学後すぐに登校禁止令が発令され、クラス全員が揃ったのは6月になってからでした。部活動や勉強を頑張ろうと意気込んで入学したものの、様々な困難に直面し、尚現在も制限された環境の中で、無事卒業を迎えられたことを嬉しく思います。

さて、いろいろと話したいことは山ほどありますが、一つだけ皆さんに伝えようと思います。

「必死のパッチ」でやりなさい。昭和の親父ギャグと言われるそうですが、私自身、毎日必死のパッチでやってます。時には失敗することもあります、必ずその姿は誰かが見えています。その必死のパッチが必ず報われるとは限りませんが、その経験は自分にとっての宝物になります。楽をしようとしても、必ず誰かが見えています。だから、「必死のパッチ」でやりなさい。



藤井 克法

『未来の自分』

28回生の皆さん全員へ 卒業おめでとうございます。この時期になるといつも思い出す好きな詩があるので、載せてみます。

人の一生は旅だという
たしかに そんな気がして
このたとえが 好きになる
雲を斜めにうけ
かんかん照りのなかで
水もない峠の岩に腰かけ
「花ばかりじゃない
とげのある石も踏まねば…」
ひとりつぶやく
それが 旅

きみらは きみだけの
ぴかぴか光る人生を
その手でつかめるのだ
二つとない きみだけの
重い歴史を
きずいていけるのだから
固有名詞のついた
人生よ 歴史よ
おめでとう
(松永伍一「巣立ち」よ

- 1年生 入学式の翌日から学校は休校。始まったばかりなのに、これからの高校生活はいったいどうなってしまうのか、とても不安。学校が6月に再開。すべてのことが縮小・自粛の毎日。だから何かとても辛かったし、やる気をなくすこともあったけれども、それでも頑張った毎日。
- 2年生 あいかわらず自粛・縮小ばかりの高校生活。いや学校だけじゃない。毎日の生活でもそうだった。でも修学旅行に行けたのはすばらしかった。こんな時代だけれど、自分の生き方を少し考えてみた毎日。
- 3年生 自粛・縮小は少しはマシになった。高3になって初めて本格的に西陵祭に頑張れた。でもすぐ進学・就職の受験が迫って来る焦りと不安。自分はこんなに弱くないはずだと思っていても、毎日襲い掛かって来る不安に潰されそう。プレッシャーの毎日が過ぎてゆき、成功した時のあの喜び。失敗した時のあの絶望感。

18歳の自分はこの3年間色々なことを乗り越えて来し、今も乗り越えようとしている。来年の今頃、自分はどんな自分になっているのだろうか。いやもっと先の22歳、25歳のころには？人生のそれぞれの時期の課題を精一杯に乗り越えながら、時には成功と失敗を繰り返しながら、自分たちは自分の人生を造っているんだなあとと思う。

